

(13) 身体によみがえり

村上伸

コリントの信徒への手紙一 15 章 1 節-20 節

使徒信条について連続の講解説教をして来ましたが、今日がその最後です。「身体によみがえり、永遠の命を信ず、アーメン」と言う箇所についてお話しします。「三日目に死人のうちよりよみがえり」については先日お話ししましたが、要約して言えば、イエスの復活とは単なる肉体の蘇生ではないということ、然し同時に単なる幻想とか主観的な思い込みとか言うものでもないということです。イエスは本当に死なれた。苦しんで死なれた。然しそのまま過去のものになったのではなく、今も生きて居られる。これは信仰における命の現実であって、単なる幻想や思い込みではありません。彼は死によって支配されるのではなく、死を克服して生きて居られる。歴代のキリスト教徒はそう信じて来たり、私たちも信じます。大体、その様なことでした。

さて今日は「我は聖霊を信ず」に始まる第三項の終わりの二行ですが、聖霊に対する信仰との関係で教会のことや聖徒の交わり、罪のゆるし等が告白されたその終わりに、「身体によみがえり」が出てくるのです。之はどういう意味でしょうか。前に、キリストが三日目に死人の中よりよみがえったと告白しましたが、それと同じことがもう一度ここに出て来ると云うことでしょうか。そうではない。ここで言う身体によみがえりとは、私たちの身体によみがえりなのです。キリストのよみがえりと勿論関係があるが、それとは別に、私たちの身体がよみがえる、と云っているのです。だから聖霊を信ずると言う第三項の中にこの言葉が出て来ることの意味があります。教会が出来、聖徒の交わりが実現する。罪のゆるしが起こり、そして私たちの身体もよみがえって永遠の生命をうけつぐ様になる。すべて私たちの問題として書かれています。

聖霊を信ずるとは、どこか天の高い所、神様のもとでと云うのではなく、私たちの中にそのことが起こるということです。聖霊を信じるとは、私達たちの中に働き給う神を信じることです。ですから言葉を補って言えば、「身体によみがえり」とは、私達のこの体、私達のこの現実もまた終わりの日によみがえる、ということ告白しているのです。

イエスが三日目によみがえったということが、使徒信条の第二項の中心で告白されていますが、この第三項では、私達の身体もまたよみがえるという信仰が告白されています。この二つのことからの関係を最も良く言い表しているのが、今日の聖書の箇所です。特に 20 節、「しかし実際キリストは死者の中から復活し、眠りについた人達の初穂となられました」。キリストの復活というのは私達の体によみがえりの初穂なのだ、私達の身体によみがえりを先取りする形でキリストは復活された。之が 20 節の意味です。キリストの復活と私達の身体によみがえりとの間にはそういう関係があるとパウロはここで述べているのです。

13 節の「死者の復活が無ければキリストの復活も無かった筈です」とか 16 節の

「死者が復活しないのなら、キリストも復活しなかった筈です」という言葉の意味は何でしょうか。私は若い頃、それが判りませんでした。この言葉は、一般的に死者の復活があると云うことを先ず認めた上で、だからキリストの復活もあるのだ、と云う論理の運びかと思われたからです。然し私はキリスト教信仰とは、一般的な真理とか哲学とか云ったものに基づいてキリストの復活を説明するものではないと思っていましたから、この論理の運びがなかなか納得出来なかったのです。随分長い間つまずきなやんでいました。

然し今回こゝをあらためて読んでみて、何か腑に落ちました。これは、キリストの復活は必ず死者の（つまり私たちの）復活をまねく、必ずそう云う結果になる、という意味ではないでしょうか。むろん様々な意見があって難しいのですが、キリストの復活は私達の身体のよみがえりに必ず結びつくという意味にとってもいいでしょう。それに結びつかないキリストの復活はあり得ない。我々の身体のよみがえりと云うことが起こらないなら、キリストの復活は無意味だった。キリストの復活が起こった以上、それは我々の身体のよみがえりの先取りとして起こったので、必ず我々の身体のよみがえりも起こる。この箇所は二つの事柄をその様な形で深く結びつけている、と私は改めて思われました。

それでは「身体のよみがえり」とは何か。一言で云えば私達に対する神の約束を信じる事。そのことの告白です。イエスの身の上に、全ての人々の上に起こるべきことの初穂として、その先取りとして起こったあの死人の中からのよみがえり。それはやがて我々の身の上にも起こる。そのことを神は約束されたのです。それは死に対する勝利です。死が勝つのではない。私達は何となく死んでしまえば終わりだと考えています。全てのことは私達が死んでしまって終わりになる、死と云うものは何よりも力強いものとしてこの世界を支配している、そんな風に私達は何となく考えていますが、然しそれは違う。死に対して生命が勝利する、キリストの身の上に起こったことはそれです。死が勝利するのではない、生命が勝利するのです。そのことを神は私達に対する約束として示しました。初穂とはそういう意味です。

私達はたしかに、やがていつか死にます。しかし私達のこの世界、人生と云うものは、一切が死を以て終わるのではありません。生命は死に勝つ。そのことをイエスの復活は私達に示してくれます。そのことが私達の世界、人生に対する神の約束として与えられているのです。使徒信条はこれまでの全ての告白の結びとして、終末論的な約束を信じる形で「我は身体のよみがえり、永遠の生命を信ず アーメン」と云っているのです。

先週、ポーランドのアンジェイ・ワイダ監督の「聖週間」と云う映画を見て深い感銘を受けました。聖週間とは受難週のことです。受難週の一週間に起こったことを、ワイダは描き出しています。ワルシャワのゲットーに閉じ込められていたユダヤ人が1943年の4月19日に、ナチスドイツに対して武装蜂起をした時の話です。彼らは5週間余りにわたって抵抗しますが、結局6千人の死者を出して沈圧される。生き残った5万人のユダヤ人は、アウシュビッツ等の強制収容所に送られたのです。

この4月19日は受難週の中の一日に当たっていた、一人の若いユダヤ人の女性が、ゲ

ットーを脱け出して、逃げる途中で偶然昔親しかった男性と出会います。この男性は結婚していて、身重の妻がいます。ワルシャワの郊外で暮らしているのですが、そこにこのユダヤ人の女性がかくまわれるのです。当時は、ナチスが押しつけた規則で、ゲットーの中のユダヤ人は外に出たら死刑ということになっていました。隠まった人も同罪です。だからこの若い夫婦は怯えながら、彼女をかくまって何とか守ろうとしますが、近所の人に密告されてしまう。最後はこのユダヤ人女性はあきらめてゲットーに帰って行くのです。その先のことは描かれていませんが、勿論、死ぬことになるでしょう。

丁度その週は受難週（聖週間）に当たっていて、金曜日、受苦日にそのかくまったほうの若い妻は身重の身をかゝえて教会に行きます。祭壇にはキリストのなきがらの彫刻が横たえられている。その傍らに彼女は進み出てキリストの傷あとに接吻するのです。彼女のお腹の中には新しい生命が育っています。自分の中に育ちつつある新しい生命。然し自分をとりまくこの世界を支配するのは死の現実です。多分そんなことを考えたのでしょう、彼女は涙を流します。私は、たしかに之が世界の現実なのだと感じました。

戦後 50 年経って、もはやワルシャワのゲットーは存在しません。然しその時殺された側のユダヤ人が今パレスチナで何をやっているか。それを思うと、死の現実が私達の世界を支配していて、私達はなかなかそこから抜け切れないと言わざるを得ません。あれ程苛酷な運命に出会ったユダヤ人でも、やはり同じことを今度は自分達がくり返す。このことから自由になり切れていません。

私は先程、詩編を共に交読していて心が痛みました。詩編 118 編です「国々はこぞって私を包囲するが 主の御名によってわたしは必ず彼らを滅ぼす」（10 節以下）このような言葉は詩編や、旧約聖書の色々な所に出てきます。私達はそれを読む度に心が痛みます。出来ることなら読まずにすませたい。然しあえてそこを読むのです。私達の世界には死の支配があって、私達もそれから自由になっていないことを知っているからです。色々な形でそのような考え方、そのような生き方をしている。

ワイダ監督は映画「聖週間」の中で、我々の世界は死が支配しているということを描きたかったのではないのでしょうか。丁度聖週間、キリストが苦しみを受けて殺された週、その週にワルシャワのゲットーであの虐殺が行われた。ワイダはこのことと人類がキリストを殺したことを重ね合わせる様にして、丹念に一つ一つの出来事を描いています。重武装したドイツ兵達。この間テレビでアルバニアの子供が銃を持って遊んでいる映像が出ましたが、丁度あの様に、まるで遊びででもしている様にして自動小銃を撃ち、人々を殺しまわるドイツ兵。火を吹くマシンガン。燃えるゲットーの家並。焰の吹き出す家々の窓から飛び降りて死ぬユダヤ人。やがてあのユダヤ人の女性をかくまった夫の方も撃たれて死にます。ワイダはこの様にして人類がキリストを殺したことと、あの一週間を重ね合わせて、丹念に描いています。死が支配する現実というものを改めて感じます。そしてそれは今も終わってはいません。私たちの世界は、死が支配している。然しその中で、キリストは三日目に死人の中からよみがえったと云うのです。死の現実が圧倒的にこの世界を支配している中で、彼は死人の中からよみがえった。

決して人を殺さなかったイエス。決して人を苦しめなかったイエス。そのことの故に苦しめられたイエス。その方は殺されましたが、しかし死の現実にもみこまれて過去の

ものになってしまうということは決して起こりませんでした。死人の中からよみがえった。そのことを信じると、使徒信条は云うのです。そしてそれはやがて我々の上にも現れる。

やがて来るべき我々の終末的な現実。その初穂としてキリストはよみがえり給うたのです。これは神の約束だと云うのです。私は「身体のよみがえり、永遠の生命を信ず。アーメン」と云う使徒信条の最後の一句は、私達に対する約束の言葉として信じたいと思います。終末の時にそれが完全に現実となる、身体というのは現実のことです。私達の現実が生命に支配される様になる、必ずそうなる。この信仰告白はそういうことです。だからヨハネ黙示録 21 章 1 節～5 節に書いてあることが「身体のよみがえり、永遠の生命を信ず。アーメン」と云う言葉の具体的内容でしょう。

(日本基督教団みくに伝道所 1997 年 3 月 30 日礼拝説教)